

Title	ラオ語のゼロ主語について
Sub Title	A study of zero-subject sentence in Lao
Author	鈴木, 玲子(Suzuki, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.55 (2024. 3) ,p.65- 88
JaLC DOI	10.14991/005.00000055-0065
Abstract	This paper aims to clarify the grammatical function of the zero-subject in natural conversation. From focusing on the occurrence situation, the 'zero-subject' refers to the subject that should exist from the syntactic point of view, but should not be uttered from the perspective of discourse structure. The grammatical functions of zero-subject are to keep the proceeding topic and to cohere the discourse.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000055-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラオ語のゼロ主語について

鈴木 玲子

Abstract

This paper aims to clarify the grammatical function of the zero-subject in natural conversation. From focusing on the occurrence situation, the ‘zero-subject’ refers to the subject that should exist from the syntactic point of view, but should not be uttered from the perspective of discourse structure. The grammatical functions of zero-subject are to keep the proceeding topic and to cohere the discourse.

1. はじめに¹

ラオ語は、形態論的には語形変化のない孤立語タイプに属する言語である。統語論上の文の基本語順は、「主語＋述語動詞＋補語」である。しかしながら、この基本語順は固定的なものではない。ラオ語は主語卓越言語（Topic prominent language²）であり、情報構造論的観点から主題を文頭に置く、話し手が自身と聞き手の両者にとって既知情報であると判断したことは述べないなど、上述の基本語順とは異なる文型を使用することを許す。換言すれば、語順操作やいわゆる省略という操作によって伝達したいことを表す言語である。したがって、ラオ語の文における主語の有無に関する要件を明らかにすることは、文の意味を理解するために重要なことである。

1 本研究はJSPS科研費23K00520の助成を受けた研究成果の一部である。

2 Li, Charles, N & S.A.Thompson (1976)

2. 目的と方法

2.1. 目的

本稿は、自然会話におけるゼロ主語文の出現環境を検討し、ゼロ主語の文法的機能を明らかにすることを目的とする。その際、会話文の中でも特に主語の位置にあるべき「第一人称＝話し手」と「第二人称＝聞き手」に着眼する。なお、「ゼロ主語」とは、統語論上、存在すべき主語であるところにおいて、談話構成上、発話してはいけない主語のことを指し、「必須主語」とは、発話しなければならない主語のことを指す。

2.2. 方法

検討方法は下記のとおりである。

- 1) ラオ語の動画（後述2.3.）の文字起こしを行い、コンサルタントにゼロ主語文の主語を復元してもらう³。
- 2) 文の種類という観点から、ゼロ主語文がどのような時に使用されるのかを整理、検討する。
- 3) 出現環境という観点から、ゼロ主語文がどのような時に使用されるのかを整理、検討する。
- 4) 1) から3) の内容をふまえて、ゼロ主語文の要件とゼロ主語の機能を記述する。

2.3. 資料

検討の対象とした言語資料は、動画①「バナナチップ売り場」と動画②「フォー屋の女子大生」の自然会話で、詳細は下表1のとおりである⁴。

-
- 3 コンサルタントは1988年生まれ、ラオスの首都ビエンチャン生まれビエンチャン育ちのラオ族女性である。日本在住歴は2019年～2020年の1年間と2022年10月以降で、2026年3月まで日本在住の予定。ご協力に心よりお礼申し上げます。会話中における文の主語の復元について、「主語があっては不自然（意味が通じない）・あってもなくてもよいが、ない方が自然・あっても自然」の3段階で判断してもらった。
 - 4 自然会話の動画作成にはJSPS科研費JP17H02331の助成を受け、Blooming Tours Sole Co., Ltd.ラオス支店の方たちの全面的なご協力を得た。ご協力に心よりお礼申し上げます。

表1

	動画時間	登場人物・人数	例文数	内容
①	5分30秒	買い手と売り子 2名	105	市場で買い手が売り子にバナナチップの種類や揚げ方、誰が買いに来るか、などを聞く。そして、最後にバナナチップを買う。
②	6分30秒	女子大生 メオ・ニー・ ディックの3名	255	3名の女子大生がフォー屋でフォーを注文し、その味付けや食べ方、食後の予定、正月のルアンパバーン行きについておしゃべりをする。

3. 先行研究

ラオ語におけるゼロ主語および必須主語に関する先行研究はこれまでのところ存在しない。本章では、日本語の省略に関する先行研究を参考に「省略」「主語」「主題」について整理しておく。

3.1. 「省略」について

効率のよい情報伝達のための手段には、さまざまな手段があると思われる。ラオ語には日本語と同様に、その手段の一つに「省略」がある。

久野（1978）は、「省略の根本原則というのは、省略されるべき要素は、言語的、あるいは非言語的文脈から、復元可能（recoverable）でなければならない。より新しい（より重要な）インフォーメーションを表わす要素を省略して、より古い（より重要度の低い）インフォーメーションを表わす要素を残すことはできない」としている。そして「同じ主題が、第一文から第二文に引き継がれるとき、第二文では主題を省略することができる」と主張している。

砂川（1990）は、「主題の省略が許されるのは、省略されたものが何を指し示しているのかが読み手に理解可能である時に限られる」と述べている。そして、主題の省略を可能にする条件として、構文的な条件の他に談話構成上の条件、あるいは言語的文脈や言語外的文脈を手がかりとした推論の成立の可能性といった条件を提示している。

本稿では、「省略」を上述の久野（1978）、砂川（1990）に従うこととする。基本的には省略は話し手が聞き手との関係において、情報を伝達する、

内容を理解してもらう、と言う観点から行う操作である。ラオ語では、後述するように、省略した要素を復元してしまうと、話し手の情報伝達を達成するための文としては意味が通じなくなる場合がある。また、何を指し示しているのか、話し手と聞き手の両者が理解可能で、省略できそうな場合でも、情報伝達を達成するためにその指示物を述べなければならない場合がある。このような場合があることから本稿では、主語の省略について、談話構成上、発話してはいけない類の主語を「ゼロ主語」と呼び、発話しなければならない主語を「必須主語」と呼ぶことにする。

3.2. 「主語」と「主題」について

仁田（1997）は「主語」について、「主語とは、述語の表す動きや状態や関係を体現する主体として、文の表している事態（文の叙述内容である出来事や事柄）が、それを核として形成されている、といった事態の中心をなしている構成要素である」と述べている。加えてラオ語においては、主語は、補語と異なり、述語動詞との間に他の構成素を介在させてもよいことや省略しやすいことから独立性が高い構成素である（鈴木2020）。「主題」については、さまざまな定義があり、多義的である。尾上（2004）は「「○○について言えば」というように話題を設定し、あるいは話の範囲を限定する要素（略）」と述べている⁵。主題には狭義には文内主題、広義には談話・テキスト主題がある⁶が、本稿では広義の意味の主題とする。また、「主題主語」については、付（2014）が「談話レベルの概念で、その文で述べたいことについて範囲または対象を限定したものである」と述べている。本稿では「主語」「主題」「主題主語」を上述の概念で捉えることとする。

4. 主語と文の種類

本章では、文の種類を文の表現意図から平叙文、疑問文、命令文、感嘆文

5 尾上（2004）では主語と同等の意味で題目語という語を使用。

6 益岡（2004）、堀川（2012）

に分類し⁷、ゼロ主語文について検討する。これら4種の文のうち、相手へのはたらきかけという表現意図から大括りで命令文と言うカテゴリーをたてるが、文型が異なるという理由から、話し手が聞き手にある動作の実行を強要する強要文、話し手が聞き手に動作の実践を依頼する依頼文、その反対で、話し手が聞き手に自分の動作の実践を請う要請文、話し手と聞き手の動作の共有を促す勧誘文の4つに下位分類して検討することにする。その他に、「えっ」などの感嘆詞一語文、「はい・いいえ」という応答や相槌、「えっと…」などのフィラー、「こんにちは」などの慣用句があるが、これらは考察の対象外とする。また、呼びかけや話し手が言い終わらないうちに相手が発話した場合の言いさし文も何を伝達しようとしたかが不明なので対象外とする。

文の種類別にゼロ主語文と必須主語文の例文数とゼロ主語率を示したものが下表2である。

表2

	文の種類	例文数			ゼロ主語文			必須主語文			ゼロ主語率 (%)
		①	②	合計	①	②	合計	①	②	合計	
1	平叙文	70	134	204	47	74	121	23	60	83	59
2	疑問文	9	42	51	2	17	19	7	25	32	37
3	命令文	5	15	20	4	12	16	1	3	4	80
	強要文	0	3	3	0	3	3	0	0	0	100
	依頼文	0	9	9	0	7	7	0	2	2	78
	要請文	5	2	7	4	1	5	1	1	2	71
	勧誘文	0	1	1	0	1	1	0	0	0	100
4	感嘆文	1	6	7	1	6	7	0	0	0	100
5	全体	99	228	327	65	135	200	34	93	127	

備考：動画①「バナナチップ売り場」 ②「フォー屋の女子大生」

表2からゼロ主語率は、感嘆文が100%、命令文が80%で、その命令文の下位カテゴリー別にみると、強要文と勧誘文が100%、依頼文が78%、要請

7 4つの文に大別したのは、文の表現意図と共に文の形が原則として異なるということに拠る。

文が71%と高めで、平叙文と疑問文はそれぞれ59%と37%であることがわかる。以下にゼロ主語率が高い順に検討する。

まず、ゼロ主語率が100%の感嘆文と強要文、勧誘文についてみていく。感嘆文は、ある場面に対する話し手自身の喜怒哀楽の感情や心情を表出する文である。即ち、叙述内容は主題に対する話し手の内面を表すものであることから、感情や思考の主体は話し手であることが明らかである（例1）。強要文と勧誘文は、例文が強要文は3例、勧誘文も1例と少ないので、コンサルタントに例文を作成してもらったところ、いずれもゼロ主語文であった。強要文は、話し手が聞き手に対してある動作の実践を強要する文である。即ち、動作の主体である主語は、その場面に実在する聞き手に限られることが明らかである（例2）。一方の勧誘文は、話し手が自身と聞き手に対してある動作の共有を促す文である。即ち、動作の主体である主語は、その場面に実在する話し手と聞き手であることが明らかである（例3）。

1) メオがフォーの味付けの後、味見をする場面

メオ huwâay, phét
 INTJ-驚嘆 辛い
 「わあ～、辛い」⁸

2) メオがニーに自分のフォーの味見をするようにはたらきかける場面

メオ síim, síim bəŋ lôot nâa
 味見する 味見する 見る ADV-絶対 PTCL-喚起
 「食べて。とにかく食べてみてよ」

3) メオがニーとディックに皆で（遊びに）行こうと誘う場面

メオ pây tho?
 行く PTCL-勧誘
 「行こう」

以上のことから感嘆文、強要文、勧誘文は、文の表現意図という観点から、誰が動作の主体で、誰に向けて発話しているか、と言うことが明らか

8 ラオ語の表記は鈴木（2006）に、グロス略号はライブツィヒのルール（The Leipzig glossing Roles）と鈴木（2019）に従う。

文であると言えよう。そして、このようなときは主語を述べる必要はないので、ゼロ主語文の形を使用するのである。

次に、ゼロ主語率がやや高めの依頼文と要請文についてみていく。依頼文はゼロ主語率が78%で、要請文は71%である。前者の方がやや高いが、大きな差ではない。聞き手にある動作の実践を依頼する依頼文も、話し手自身のある動作の実践を聞き手に請う要請文も、話し手と聞き手の両者が実在し、対面で使用されてこそ依頼や要請という文の表現意図が果たされるわけである。換言すれば、頼む、もしくは請う、という表現意図である以上、場面に話し手と聞き手の両者が実在しているので、誰が動作の主体で、誰に向けて発話しているかが明らかである（例4, 5）。したがって、ゼロ主語率が100%ではないものの、先の感嘆文、強要文、勧誘文と同様に、依頼文と要請文も原則として主語を述べる必要はないと言える。即ち、依頼文や要請文も文の表現意図という観点から主語は必ず話し手か聞き手のいずれかであることが明らかであり、そのようなときはゼロ主語文を使用するのである。

- 4) フォーの味付けをするためにメオが調味料の近くにいるニーに言う場面
- | | | | | | |
|----|-----|-------|------|-----|----------|
| メオ | ʔăw | khuaŋ | pŭŋ | hăy | nœ |
| | とる | 物 | 調整する | 与える | PTCL-REQ |
- 「調味料をとって」

- 5) 買い手がバナナチップを手にして、売り子に言う場面

買い手	khǎo	síim	bəŋ	nœ
	下さい	味見する	見る	PTCL-REQ

「味見させてください」

感嘆文のような話し手の感情表出、命令文のような聞き手に強要、依頼、要請、勧誘などのほたらきかけを叙述する文は、誰に対する叙述であるかが明確である。そのようなときは、ゼロ主語とすることが明らかになった。ここで残された問題としては、表2で主語必須文として挙がっている依頼文の2文、要請文の2文である。本来はゼロ主語でよいところに敢えて例外的に主語を述べているこれらの文は一体、どのようなことが原因でゼロ主語文とならないのか、ということを考える必要がある。このことについては第6章

6.2.で検討する。

最後にゼロ主語率が高いとは言えない平叙文と疑問文についてみていく。平叙文と疑問文は、表3と表4に示すように、主語が話し手・聞き手に限定されず、さまざまで、先の感嘆文や命令文と異なり、文の表現意図から主語が限定されるという類の文ではない。

表3 平叙文

主語	例文数			ゼロ主語文			必須主語文			ゼロ主語率(%)
	①	②	計	①	②	計	①	②	計	
話し手	18	60	78	16	43	59	2	17	19	76
聞き手	2	20	22	2	11	13	0	9	9	59
話し手/聞き手以外	50	54	104	29	29	49	21	34	55	47

表4 疑問文

主語	例文数			ゼロ主語文			必須主語文			ゼロ主語率(%)
	①	②	計	①	②	計	①	②	計	
話し手	0	6	6	0	3	3	0	3	3	50
聞き手	2	21	23	2	9	11	0	12	12	48
話し手/聞き手以外	7	15	22	0	5	5	7	10	17	23

平叙文の中でも返答文について着目したい。なぜなら返答文は、疑問文の叙述内容を受け継いで回答する文である以上、文脈により、誰が動作の主体で、誰に向けて発話しているかと言うことが明らかな文だからである。表5のとおり、返答文は全部で22文あり、そのゼロ主語率をみたところ、91%と非常に高い。これは先の感嘆文と命令文にみたような文の表現意図に拠るのではなく、文脈に拠るものであるが、このことから誰が動作の主体で、誰に向けて発話している明らかな場合はゼロ主語となると言えよう。

表5 返答文

文の種類	例文数			ゼロ主語文			必須主語文			ゼロ主語率 (%)
	①	②	計	①	②	計	①	②	計	
平叙文										
返答文	8	14	22	7	13	20	1	1	2	91

返答文中、必須主語文がわずかではあるが2例ある。本来、ゼロ主語文であるはずのところに敢えて例外的に主語を述べているこれらの返答文については、何らかの別の要件がはたらいっているためであると思われる。このことについては第5章5.2.で検討する。

疑問文も話し手が知りたい情報を得るために尋ねるという疑問文の表現意図を考えれば、対面の自然会話においては、誰が動作の主体で、誰に向けての発話であるかということが容易に想像できる文である。したがって当然、主語が聞き手の場合はゼロ主語率が高いと予想される。ところが、実際は表4のとおり、ゼロ主語率が48%で、必須主語率の方がやや高い。この点についても上述の返答文必須主語文2例と同様に、何らかの別の要件がはたらいっているためであると思われる、第5章5.2.で検討することにする。

以上、文の種類と言う観点からゼロ主語文を検討した。その結果、文の表現意図によって、動作の主体が誰で、叙述の内容が誰から誰に向かって発話されるものであるか明らかな文は、ゼロ主語文を使用するということと言える。

5. ゼロ主語文と出現環境

本章は、前章の調査結果を受けて、疑問文と平叙文について、どのようなことが要因となってゼロ主語文となるのかを文の出現環境に着眼して検討する。

5.1. ゼロ主語文と先行文脈

疑問文19文と平叙文121文の合計140文のゼロ主語文における出現環境を検討する。その際、コンサルタントによる主語の復元の可否も確認する。話し

手と聞き手が同じ主題を扱っている話の内容のまとまりを一つの談話であるとみなして、特に先行文脈に着眼したところ、ゼロ主語の出現環境を次の3つに分類することができる。

- ①直前の先行文を含む先行文脈の主題と同じものが主語のとき
- ②直前の先行文の焦点と同じものが主語のとき
- ③①と②のいずれにもあてはまらないとき

以下にそれぞれの例を示す。

例6)と例7)は①の例である。例6)は、直前の先行文で主題マーカ― là? を伴う「háv私達」という主題主語があり、後続文は同じ「háv私達」が主語である。このとき後続文はゼロ主語文となっている。そして例6)のやりとりに後続する例7)は、先行文脈である例6)のメオの文の主題「私達」と同じで、ゼロ主語文となっている。

6) フォーを食べた後、何をするか相談する場面

メオ háv là? pǎy kìn kalêm bəʔ, ディック⁹ het bót
IPL TOPM 行く 食べる アイス PTCL-Q する レポート
「私達、アイス食べに行かない？」 「レポートやろうよ」

7) 例6)のメオの誘いに応えとして、ディックに同調する場面

ニー 〇 het bót koon
する レポート ADV-まず
「まずレポートやってから」

先の第4章において、返答文が高いゼロ主語率を示すことをみた。これは出現環境としては①に属する。繰り返しになるが、返答文である以上、先行の疑問文の主題を受け継いでいなければ、何についての返答かわからず、返答文としての情報役割を果たさない。換言すれば、返答文の主題は、疑問文の主題と同一ものを指していなければならない。このように主題として同一

9 「〇」はゼロ主語を示す。

のものを指示するときはゼロ主語文となる（例8）。

8) お正月にどこへ行きたいか、と誘い、さらに続けて具体的な目的地を挙げて誘う場面

メオ tɛɛ múŋ si? pǎy sǎy,
 CONJ 2SG IRR 行く Q-どこ
 Ø pǎy nǔa nám kǔu yuu tí?
 行く 北 PREP-と 1SG PROG PTCL
 「けど、あんたはどこへ行きたいの? 私と一緒に北部地方へ行くでしょ?」

ニー Ø pǎy
 行く
 「行くわよ」

例9) は②の例で、先行文で焦点マーカー-dé?を伴う「múŋあんた」という主語があり、後続文は同じ「múŋあんた」が主語である。このとき後続文はゼロ主語文となっている。

9) 黙って聞いていたディックと一緒に出かけようと誘う場面

メオ múŋ dé? míi phěen cǎŋdǎy,
 2SG FOCM ある 計画 Q-どう
 Ø yàak pǎy nám kǔu bǎo
 AUX-願望 行く PREP-〜と 1SG PTCL-Q
 「あんたはどんな計画があるの? 私と一緒に行きたい?」

例10)も先行文の焦点を後続文が主語として受け継いでいる例である。

10) 売り子がバナナチップの意外な購入者として大使館を挙げる場面

売り子 láaŋ thua kɔ? sathǎanthûut wiatnáam máa,
 NUM CLF PTCL 大使館 ベトナム 来る
 Ø máa ʔǎw nám háw¹⁰
 来る とる PREP 1SG
 「ときどきね、ベトナム大使館も来るのよ。私のところに来るの。」

出現環境③の文は、コンサルタントの主語復元の可否において、自然会話

10 この文の主語は「ベトナム大使館（にいる人々）」。

のやりとりとしては「主語があってもよいが、ない方が自然な文」であった。これらのゼロ主語文をみると、先行文脈と同じ主題を扱っているとは言えない場面や異なる談話の冒頭の場面もある。ただし、これらの場面は現場の状況から主語が誰であるの明らかな場面であると言う特徴がある。換言すれば、これらは全て主語が直示的な現場指示で理解できる場面なのである。

例えば例11)は、会話の冒頭、バナナを指して、買い手が売り子に向かって発話している文である。このときの主題は「このバナナ」で、主語は「売り子=聞き手」だが、現場指示により誰を指しているか明らかで、主語の情報伝達の必要性は極めて低いのでゼロ主語となる。

11) 買い手が初めて売り子に話しかける場面

買い手 mǎak kúay nǐ Ø cǔun tɛ sǎw wǎa
 バナナ DEM-これ 揚げる PREP- ~から 朝 PTCL-Q
 「このバナナ、朝から揚げているの？」

ところで平叙文の叙述内容を詳細にみると、話し手自身の思考や感情を表現する文のときにゼロ主語文が多いようである（例12, 13）。これは、自身の内面を表現する文の主語は話し手自身であり、その使用場面において直示的現場指示であると考えられる。売り子が買い手に背中を向けて小さな声でつぶやいている例14)の独白文も同様の理由でゼロ主語なのであろう。これらの例は全て③に属するゼロ主語文である。

12) 注文したフォーの中身に対する考えを述べる場面

メオ Ø yǎak dáy sǐin nɔ?
 AUX-願望 得る 肉 PTCL
 「肉がほしいんだけど」

13) メオがフォーを味見したのを見て、味の感想を互いに述べる場面

ニー Ø sêp nɔ?, メオ ʔǎə Ø sêp sêp
 おいしい PTCL うん おいしい おいしい
 「おいしいよね」 「うん、おいしい、おいしい」

14) 売り子がスライサーを使ってバナナを薄く切りながら手元を見てつぶやく場面

売り子 𑜋 sɔ̌ɔy múuu hú? hú?
 削ぐ 手 (笑い声)
 「手を切りそう、ふふふ」

以上、ゼロ主語文の出現環境をみた。

5.2. ゼロ主語文と必須主語文

ゼロ主語文の出現環境の特徴をさらに詳述するためには、主語を必要とする必須主語文の出現環境を考える必要がある。そこでまず、疑問文32文と平叙文83文の合計115文の必須主語文における出現環境を検討する。先の5.1.と同様に、話し手と聞き手が同じ主題を扱っている話の内容のまとまりを一つの談話であるとみなし、先行文脈に着眼したところ、大別して必須主語の出現場面を次の2つに分類できる。

- ①直前の先行文や先行文脈の主題や焦点と同じではないものが主語のとき
- ②直前の先行文や先行文脈の主題と同じものが主語のとき

上記①と②のうち、①はゼロ主語文の出現環境①②と真逆の環境である。このようなときの必須主語文は、直前の先行文や先行文脈と文との間に継続的な脈絡がなく、意味的な断絶がある場面で使用されている。これは例15)や例16)にみるように、先行する談話とは異なる別の談話の始まりの文である。必須主語文によって先行する談話との境界線を示し、新たな談話の始まりが明示されると考えることができる。

15)

買い手 ʔəə sêep, thõŋ nĩ ni? thawdăy
 うん おいしい 袋 DEM-この TOPM Q-いくら
 「うん、おいしい。この袋って、いくら？」

例15) は、先行文まではバナナチップを味見して、味の感想を述べている

場面で、主題はバナナチップであるが、後続文以降はバナナチップが入っている袋の値段を聞く場面となり、主語は「この袋」になる。即ち、先行文と同じ主題を受け継がないときに必須主語文になる。

16)

買い手	ʔǎnnii	mɛɛn	kûay	həəm,	khón	láaw	niʔ
これ	COP		バナナ	半熟だ	人	ラオス	FOCM
	mak	kín	bəə				
好きだ		食べる	PTCL-Q				

「これは半熟バナナだね。 ラオス人、食べるのが好き？」

例16) は、先行文まではバナナの種類が話題の場面で、先行文の主題は「これ」、焦点は「半熟バナナ」であるが、後続文以降はバナナチップが好きな人を聞く場面となり、主語は「ラオス人」になる。即ち、先行文の焦点を主題として受け継がないときに必須主語文になる。

一方の②は、先のゼロ主語文の出現環境①と同じであるので、さらに詳細に例文をみたところ、次の②-1から②-4に限定される場面であることがわかった。

- ②-1 主語を他者との関係で取り立てたり、別の主語と対照させたいとき
- ②-2 別の視点から主題を捉えるとき
- ②-3 先行文脈と時空間的な違いがあるとき
- ②-4 他の登場人物や他の主題の介在があるとき

上記②-1から②-4は、一見、同一談話内の同一主題であるように捉えられる。しかし、直前の先行文や先行文脈との間に継続的な脈絡はあるが、主題を対照させたり、別の視点から場面を捉えるといった談話の再設定や細分化が行われており、いわば新しい主題の談話設定が行われている場面であると言えるだろう。以下にそれぞれの例を示す。

例17) は②-1の例である。ディックがまだクーン山に行っていないということを聞いて、メオは自分とディックを対照させるために、先行文脈と同

じ主題の「あんた」を主語とした必須主語文を使用している。

17)

メオ múŋ dé? ɲáŋ bəʊ kʰáəy pǎy mɛɛn bəʊ,
 2SG TOPM ADV-まだ NEG AUX-経験 行く 正しい PTCL-Q
 「あんたは？ まだ行ったことがないんでしょう？」

ディック 𑜀 ɲáŋ bəʊ kʰáəy pǎy phúu kʰúun,
 ADV-まだ NEG AUX-経験 行く 山 クーン
 「まだクーン山に行ったことないわ」

メオ múŋ bəʊ kʰáəy pǎy phúu kʰúun! kũu pǎy máa lêw dé?
 2SG NEG AUX-経験 行く 山 クーン 1SG 行く 来る PRF PTCL
 「あんた、クーン山に行ったことないの！ 私はもう行ったわよ」

例18) は②-2と②-3の例である。メオがニーとディックにお正月にどこかへ出かけようと誘ったところ、それに直接応答せずに、ニーが去年の学校の正月イベントのことを述べた。それを受けて、メオがニーとディックに2つの疑問文を発話している場面である。一つ目の疑問文は、昨年のことを言った先行文脈と時空間的なずれがあるので必須主語文となっている。二つ目の疑問文は、動作の主体、即ち主語が先行文と同じであるのでゼロ主語文のはずであるが、先行文は学校のお正月行事、後続文はお正月時に遠出する行き先を話題にしており、両者はお正月についての談話であることは変わらないが、別の視点からお正月に関する叙述がなされている。これは、一見、全く同じ談話の同じ主題主語のようであるが、視点の転換が行われる談話の細分化ともいうべき場面である。このようなときに必須主語文となる。

18)

ニー ʔăacăan waa yuu hóoŋhian háw koo cáat,
先生 COMP PREP 学校 1PL LINK 催す

pǐi kăay koo cáat tíʔ
年 去る LINK 催す PTCL-喚起
「先生が言っていたけど、学校もやるって。去年だってやったじゃない」

メオ pǐi nǐi sǔu khít waa caŋdăy laʔ,
年 DEM-この 2PL 思う COMP Q-どう PTCL

sǔu yàak pǎy lín sǎy
2PL AUX-願望 行く 遊ぶ Q-どこ
「あんた達、今年はやると思う？ あんた達、どこへ行きたい？」

例19) は②-4の例である。メオが観光の費用について話していたところ、ニーが割って入って観光地の景色のことを尋ねた。それに少し応答した後、再び費用の話をする場面である。談話が一度断絶されたので、改めて元の談話を再設定する必要があり、このようなときに後続文は必須主語文となる。

19)

メオ boo khǎən ɲop hōot lāan hóəy, khaa lotfáy
NEG 超える 予算 届く 百万 PTCL 賃金 電車

míi tɛɛ sǎamsěenhàa dáy
ある PERP-だけ 35万 PTCL-不服
「100万いかないのよー。電車代はたったの35万なのよ」

ニー tɛɛ wíw ɲáam mɛən boo
CONJ-しかし 景色 美しい 正しい PTCL-Q
「けど景色はきれいなよね？」

メオ ʔǎə ɲop nǐi naʔ hóəy, lúam, lúam
うん 予算 DEM-この PTCL PTCL 合計する 合計する

tháj ʔǎahǎan phōəm dáy
～も 食事 揃う PTCL-不服
「うん。この金額ね、含むのよ、ご飯代も含むのよ」

最後に先の第4章で保留にした検討事項について述べる。それは、ゼロ主語文を使いそうだが、実際は、必須主語文を使用している例外的な返答文や疑問文についてである。

返答文は2例（表5）あったが、それらの出現環境をみると、いずれも②-1であることがわかる。例20）は、お正月にどこへ行きたいか、という質問に対して、他の友人と対照させて、自分が行きたい場所について応える場面である。例21）は、ラオス人はバナナチップを好んで食べるか、という質問に対して、ラオス人と外国人を対照させて、ラオス人を取り立てる場面である。

20)

ニー	kūu	yàak	păy	lǎaŋphabǎaŋ
	1SG	AUX-願望	行く	ルアンパバーン

「私はルアンパバーンに行きたい」

21)

売り子	khón	láaw	lě?	mak	kín,
人		ラオス	TOPM	好きだ	食べる
	khón	taaŋpathəet	koo	mak	
	人	外国	LINK	好きだ	

「ラオス人こそ好きなのよ。外国人も好きだけど」

一方、疑問文についての出現環境をみると、いずれも②-2であることがわかる。まず、主語が話し手のときの必須主語文3例（表4）をみると、その内分けは、話し手のみの「私」が1例と聞き手を含む「私達」が2例である。主語が「私」の例22）は、お正月時に遠出をすることについて、自分に行きたいが、母が許可してくれるかどうか、むしろ許可しない可能性が高く、客観的に自分を外から見るような言い方をするために、自分の愛称ディックを使用している文である。普通は自己の視点で把握し、表現する叙述内容であるところ、いわば視点を少し変えた談話の細分化ともいべき文であるので、必須主語文となっている。

22)

ディック tɛɛ dík si? pǎy dáy bəʊ
 CONJ-しかし ディック IRR 行く PSBL PTCL-Q
 「だけど私 (=ディック)、行けるかなあ」

主語が「私達」の例23)は、「どこへ行く?」と行き先を聞いている先行文の主語と後続文の主語が同じであるので、ゼロ主語文となりそうだが、「アイスを食べに行く」と具体的に場所を提案して、行くかどうかを聞く文である。いわば視点を少し変えた談話の細分化ともいうべき文であるので、必須主語文となっている。

23)

メオ háw si? pǎy sǎy tɔɔ, háw là? pǎy
 1PL IRR 行く Q-どこ 続く 1PL TOPM 行く
 kǐn kalém bəʊ,
 食べる アイス PTCL-Q
 「私達、このあとどこへ行く? 私達でアイス食べに行かない?」

主語が「あんた」の例24)は、先行文脈でメオが聞き手であるニーとディックにお正月時、一緒に遠出することを誘ったところ、ニーは応えたが、黙って聞いていたディックに向かって改めて何か計画があるのかを問う文である。これも視点を少し変えた談話の細分化ともいうべき文であるので、必須主語文となっている。

24)

メオ múŋ dé? míi phěen caŋdǎy,
 2SG FOCM ある 計画 Q-どう
 「あんたはどんな計画があるの?」

以上、必須主語文の出現環境をみてきた。必須主語文は、出現環境①の他に②-1から②-4があり、いずれも先行文脈と同じ主題、且つ同じ視点ではない。これは、先のゼロ主語文と異なる出現環境である。ゼロ主語文は、新

しい主題の設定、主題の再設定、視点の変化による談話の細分化という環境では使用しない。同じ談話内で同じ主題主語を同じ視点から述べるとき、ゼロ主語文を使用するのである。換言すれば、一つの同じ談話というくくりにおいて、主語が同じものを指し示し、それを維持するときにゼロ主語文の形をとるといえる。

6. ゼロ主語の機能

本章では、第4章と第5章で検討したことに基づき、ラオ語におけるゼロ主語文の要件は、①文の表現意図、②談話の結束性、③会話ストラテジーの3つであるということと、これらの要件から導き出されるゼロ主語の機能を記述する。

6.1. 文における表現意図

第4章において感嘆文で話し手の感情を表現する場合は、ゼロ主語であることをみたが、第5章の使用場面からみた平叙文でも話し手の感情表現を表す文、たとえば「おいしく感じる」の感覚や「ルアンパバーンに行きたい」という願望を表す文は先行文脈に主語がなくてもゼロ主語文であることを示した。これは、「おいしい」「行きたい」などの感情や願望は、内面的な思考や感情の表現であり、普通は現時点での話し手の感情と理解されるからであろう。対面の自然会話という現場指示状況における感情、感覚、心理状態、願望、独白などの主体は話し手であることが明らかであるので、これらの意図を表す文の主語（＝話し手）は述べる必要はなく、ゼロ主語文となるのである。

強要や依頼、要請、勧誘を表す文は、文の表現意図から主語が話し手が聞き手に限られると言える。文の使用場面に関係なく、主語の選択が限定されるこれらの文は主語を述べる必要がない。主語を述べると文の表現意図自体が保持されないことになってしまうため、ゼロ主語でなければならない。

このように考えると、話し手の発話意図が「命令」「依頼」「勧誘」「感嘆」「願望」「感情」を表す場合は、ゼロ主語文の形をとることによって、文の表

現意図が明示化される。換言すれば、ゼロ主語は文構成素としての必須要素であり、文の表現意図の明示化という機能を有すると言えよう。

6.2. 談話の結束性

第5章で、先行文脈の主題と同じ、且つ同じ視点で発話するときはゼロ主語で、そうではないときは必須主語となることを示した。「問い」と「応え」という疑問文と返答文のやりとりにみるように、自然会話では、話し手と聞き手が互いに伝達したい情報のみを発話している。その際に重要になるのが互いのやりとりにおける主題の一致や談話の結束性である。主題が一致していれば主題主語は述べない。一致していなければ主題主語は述べる。このことは「主題卓越言語では、主題連鎖と言う現象で主題を省略する（付2014）」ということの現れで、ゼロ主語は主題の維持化を示す操作の一つであると言えよう。

例えば、例25) は、例6) と例7) の再掲であるが、同じ主題が先行文から後続文に受け継がれるとき、後続文はゼロ主語文となる。さらにはそのまた次の後続文でも第一先行文の主題を受け継いでおり、ゼロ主語文となっている¹¹。文の主語が主題として提示され、同じ主題を維持する限り、後続文はゼロ主語文なのである¹²。そうすることによって、一つの結束性のある談話が構成される。

25) フォーを食べた後、何をするか相談する場面

メオ	háv	là?	páy	kín	kalêm	boo,	ディック	Ø	het	bót
	IPL	TOPM	行く	食べる	アイス	PTCL-Q			する	レポート
			「私達でアイス食べに行かない？」							「レポートやろうよ」
ニー	Ø	het	bót		koon					
			する	レポート	ADV-まず					
			「まずレポートやってから」							

11 久野（1978）の「ハのピリオド越え」に相当する。

12 この現象について、久野（1978）は「反復主題省略」とであると述べている。

ここで先の第4章で、主語が省略されなければならない文であるにも関わらず、省略されていない例外的な文であった依頼文（例26）と要請文（例27, 28）の出現環境をみる。

26)

メオ	múŋ	ʔǎw	nân	hàŋ	kǔu	nɛɛ
	2SG	とる	DEM-それ	与える	1SG	PTCL-REQ

「あんた、それ、私にとってよ」

例26) は、フォーの味付けについての談話の一部で、直前の先行文でメオ自身が砂糖を入れないのは病気だからではない、と言った後に続く文である。話し手である「私＝メオ」が自分から聞き手に視点を変えて、メオが調味料の近くにいる聞き手（＝あんた）に依頼する文である。

27)

買い手	háw	khǒo	bəŋ	nɛɛ,	withíi	cǔuun
	1PL	REQ	見る	PTCL-REQ	方法	揚げる

「私に見せてくださいよ、揚げ方を。」

例27) は、直前の先行文まではバナナチップの購入者についての談話であったところ、その内容を受け継がず、買い手が売り子にバナナチップの味見を要請する文である。

28)

メオ	kǔu	siim	nɛɛ
	1SG	味見する	PTCL-REQ

「私に味見させて」

例28) は、フォーの味についての談話の一部で、直前の先行文でメオが主語「あんた」を使用して、「あんた、おいしい？」と尋ねた後、その返答を待たずに続ける文である。話し手である「私＝メオ」が聞き手から自分に視点を変えて、自分（＝私）に味見をさせてほしいと要請する文である。

上述の例26)、27)、28) から、新たな談話に入る場面、あるいは先行文脈とは異なる人物に視点を移す場面のときには必須主語文になっていることがわかる。先行談話とは異なる主題の提示が必要な場合には、依頼文や要請文であっても必須主語文の形をとるのである。このことは、文の表現意図という要件よりも談話の結束性という要件の方が優位に働くことを示している。

以上のことからゼロ主語文は、同じ主題を維持し、同じひとくくりの談話として結束性を保たせるものであることがわかる。換言すれば、ゼロ主語は、主題の維持化・談話の結束化という文法的機能を有すると言えよう。

6.3. 会話ストラテジー

最後にゼロ主語文の要件として、もう一つ、話し手の会話ストラテジーを挙げることができる。第5章の出現環境③はこの要件に相当する。その理由は、出現環境③の例文は、先行文脈と同じ主題を扱っているとは言えない場面や異なる談話の冒頭の場面の文もあるが、全て直示的な現場指示で主語が理解できる場面であった。会話では効率よく正確に情報を伝え、円滑に会話を進めるために伝達情報の軽重選択という会話ストラテジーがはたらく。それほど伝えなくてもよい情報や伝えなくてもわかる情報は省略する。先行文脈において、主語が何も言及されていない場合でもゼロ主語文の存在が認められたのは、直示的な現場指示で主語が誰であるか明らかな場面だからである。換言すればゼロ主語は、直示的現場指示の機能を有すると言えよう。

7. おわりに

7.1. 結論

ラオ語では、「文における表現意図」「談話の結束性」「会話ストラテジー」の要件によりゼロ主語文が使われている。

「文における表現意図」や「会話ストラテジー」の要件を満たしているにもかかわらず、ゼロ主語文ではなく、必須主語文を使用する場合がある。これは、「談話の結束性」という要件が優位的制限としてはたらいっているからである。換言すれば、ゼロ主語の要件のうち、最も優位性が高いのは「談話

の結束性」である。このときのゼロ主語の文法的機能は、主題の維持化と談話の結束化であると言える。このことからラオ語の文は「伝達機能」という言語の最も重要な機能、即ち「いかにわかりやすく正確に伝えるか」という観点に立って必要な構成素を置く、という文構造であると言える。

7.2. 今後の課題

本稿では、自然会話におけるゼロ主語文の中でも主に主語が話し手である「私」と聞き手である「あなた」に着眼して検討したが、話し手と聞き手だけではなく、他の主語についても検討する必要がある。また、小説や論説など、他の言語資料においても検討する必要がある。これらのことについては今後の課題としたい。

〈使用グロス一覧〉

1	一人称	2	二人称	ACHV	達成
ADV	副詞	AUX	助動詞	CLF	類別詞
COMP	補文マーカー	CONJ	接続詞	COP	コピュラ
DEM	指示詞	FOCM	フォーカスマーカー	INTJ	間投詞
IRR	非現実	LINK	繫辞	NEG	否定
NUM	数量詞	PRF	完了	PL	複数
PROG	継続	PSBL	可能	PTCL	句末助詞
PTCL-Q	疑問助詞	Q	疑問詞	REQ	依頼/命令
SG	単数	TOPM	主題マーカー		

参考文献

- 尾上圭介. 2001. 『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
 尾上圭介・編. 2004. 『朝倉日本語講座 6巻 文法Ⅱ』, 朝倉書店
 甲斐ますみ. 2000. 「談話における 1・2 人称主語の言語化・非言語化」『言語研究』
 117: 71-100. 日本言語学会
 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわばり理論—言語の機能的分析』大修館書店

- 久野暲. 1978. 『談話の文法』 大修館書店
- 鈴木玲子. 2006. 「ラオ語の名詞句」『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』 119-153. 東南アジア諸言語研究会編, 慶應義塾大学言語文化研究所
- . 2019. 「ラオ語の情報表示の諸要素」『語学研究所論集』 24: 393-400. 東京外国語大学語学研究所 (言語データ)
- . 2020. 「ラオ語の語順と情報構造」『東京外大東南アジア学』 26: 43-75. 東京外国語大学東南アジア地域ユニット
- . 2021. 「ラオ語の主題」『言語の類型的特点対照研究会論集』 4: 17-36. 日中言語文化出版社
- 砂川有里子. 1990. 「主題の省略と非省略」『筑波大学 文芸言語研究言語編』 18: 15-30
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説』 くろしお出版
- . 1999. 『日本語のモダリティと人称』 くろしお出版
- 付改華. 2014. 「日本語における主語省略の条件についての考察」新潟大学大学院博士論文
- 堀川智也. 2012. 『日本語の「主題」』 ひつじ書房
- 益岡隆志. 2004. 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」益岡隆志・編『主題の対照』 3-17. くろしお出版
- 宮島敦子. 2018. 「文章表現と会話における日本語の主語の省略」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 44: 133-146
- Enfield, N.J. 2007. “A grammar of Lao.” Mouton de Gruyter
- Li, Charles, N & S.A.Thompson. 1976. “Subject and Topic.” Academic Press